

第五章 夕霧の物語 柏木哀惜

[第一段 夕霧、一条宮邸を訪問]

*一条の宮には(未亡人となった女二の宮がお住まいの一条宮邸は)、まして、おぼつかなく*別れたまひにし恨みさへ添ひて(まして衛門督が衰弱したまま心残りながらも大臣邸にお戻りになった別れの悲しさに加えて)、日ごろ経るままに(亡くなって日が経つほどに)、広き宮の内(広い宮邸内は)、人気少なう心細げにて(人の出入りも少なく寂しげで)、親しく使ひ慣らしたまひし人は(督が宮邸での御用に親しく使っていた従者は)、*なほ参り訪らひきこゆ(まだ宮邸に詰め申ししていました)。 *「いちでうのみや」は三章四段に「一条にものしたまふ宮」とあった<女二の宮>のことらしい。当たり前のように「一条の宮」と呼称するが、現代文の書き方としては、特にそれを秘匿する意図でも無い限りは、衛門督と結婚したという話題が出たその時に、先ず以て相手の人物紹介としてその人の由緒や在所と衛門督が通うのか入り向くのかなどの結婚形態を説明するのが普通で、その背景認識に立って読者も話を読み進むものだろうに、当時の宮家なり摂関家なりの生活様式は作者も当時の読者も常識として踏まえていたのか、朱雀院の更衣腹内親王で二の姫だとの説明はあったが、他に詳しい説明も無いままに、此処で既知のこととして「一条の宮」と呼ぶ執筆姿勢には閉口する。いや、今に始まったことではないが。 *「別れ」は<死別>のことだろうか。「おぼつかなし」は<様子が分からない>という意味でもあるので、「おぼつかなく別れたまひにし」を<臨終に立ち会えなかったので最期の様子が分からずにお亡くなりになった>という文意に解することも出来そうだが、だとすると「まして」が浮く。「まして」を<妻だと言うにも関わらず>という一般語用と取るのも不可能ではないのかも知れないが、文の流れからして、この「まして」は藤原家の人々に比して、特に母北の方に比して<更に>という言い方に、私には見える。であれば、この「おぼつかなく別れたまひにし」はやはり、年末の六条院での試楽の後の御賀当日までの間に、衛門督が一条宮邸から実家の藤原大臣邸に引き戻されたことを指していて、そのことは「大臣、母北の方思し騒ぎて、よそよそにていとおぼつかなしとて、殿に渡したてまつりたまふを、女宮の思したるさま、またいと心苦し。」(若菜下巻十二章二段)と語られ、またその別れを衛門督は「泣く泣く渡りたまひぬ。」(同三段)とあり、「宮はとまりたまひて、言ふ方なく思しこがれたり。」(同三段)とあった。是に即して「おぼつかなく別れたまひにし」を読むなら<心残りながらも実家にお帰りになった>と言い換えるべきだ。 *「なほ」は<今でもまだ>くらいの言い方のようだ。今は衛門督の四十九日も過ぎた頃、だろうか。衛門督が死んだのが二月中旬とすれば、今は三月下旬というか月末近くだ。朱雀院の五十賀が昨年末の12月25日(若菜下巻十二章四段)とあり、衛門督が大臣邸に療養帰宅したのがその直前らしく、明けて新年一月の幾らか気分の良い中旬だろうか、督は宮に手紙を送り、その返書使者に侍従が督を見舞った。形ばかりだが、督はそれなりに慰められて観念も着いたらしい。その直後に宮は男子を出産した。三月上旬に五十日の祝いがあったようなので、若君は一月中旬の生まれだろう。が、宮は産後の肥立ちが悪く、死ぬ前という言い方で仏門帰依した。それが、一月下旬か二月上旬。それを知った衛門督は大体の見通しがついて役目の終わりを悟った、のだろうか。二月中旬に源君に最後の拠り所を託すと息を引取った。逐一の日付こそ無いが諸事連続して、正月二ヶ月ほどの間に慌しくも藤君は逝った。だから、「まだ」以前の使用人が以前の職のまま仕えていた、ということらしい。

好みたまひし鷹、馬など(衛門督のお気に入りだった鷹狩りの鷹や馬など)、その方の預りどもも(その世話を任されていた係りの者たちも)、皆*つくところなう思ひ倦じて(皆仕事の張り合いが無くて先行きを案じて)、かすかに出で入るを見たまふも(辛うじて日々の作業に立ち働くのを御覧になっても)、ことに触れてあはれは尽きぬものになむありける(宮様はその全てが残念なこ

とに思われるようです)。 *「つくところなし」は<尽くし甲斐が無い=仕事の張り合いが無い>。 *「思ひ倦ず(おもひうんず)」は<思い倦ぐねる=打開策が見つからない=途方に暮れる>。

もて使ひたまひし御調度ども(ご愛用なさっていた御道具類や)、常に弾きたまひし琵琶、和琴などの緒も取り放ちやつされて(いつも弾いていらした琵琶や和琴などの絃も取り外し手入れもされずに)、音を立てぬも(音を立てないのも)、いと*埋れいたきわざなりや(実に静まり返った宮邸のありさまです)。 *「むもれいたし」は「埋もれ甚し」とも表記され<気持ちが晴れ晴れしない。気が沈んでいる。>また<内気すぎる。控え目すぎる。>と大辞泉にある。ざっと<目立たな過ぎる、内に籠もり過ぎる>みたいな語感だが、此处では宮邸の様子を述べているのだから<静まり返る>くらいだろう。

御前の木立いたう*煙りて(前庭の桜の木々が盛んに芽吹いてそのうごめきに景色も揺らいで)、花は時を忘れぬけしきなるを眺めつつ(花は咲く時を忘れない様子なのを眺めながら)、もの悲しく、さぶらふ人びとも、鈍色にやつれつつ(物憂げに宮に側仕え申し上げる女房たちも喪服姿に身をやつして)、寂しうつれづれなる昼つ方(寂しく是と言って用も無い昼時分に)、*前駆はなやかに追ふ音して(先払いが派手な音で人払いをして)、ここに止まりぬる人あり(この宮邸に止まる牛車がありました)。 *「けぶる」は今の「けむる(煙る)」で<煙が立つ>という他に<もやって見え難い>または<一面に霞み立つ>を意味する。だから、「煙る」よりは「気振る」が原義かも知れない。此处では更に<一面に霞立つように芽を吹いて>または<芽吹きを産毛のようにまとって>いる風情を言っているらしい。字を追うだけでは「木立」や「花」が何を指すのか分からないが、晩春の「花」が<桜>を意味することは、以前のいくつかの場面描写にあったので、当時の読者を気取って読めば、上手い表現に思えなくもない。 *「前駆」は「さき」と読みがある。「前駆」は普通「さきおひ、さきばらひ」と読むようで、「さき」はその略語とのことで、写本に「さき」と平仮名表記されていたものを、その意味を取って「前駆」と校訂したものの可能性が高い。即ち「先追ひ、先払ひ」は<貴人の通行の時、先にいる通行人を追い払うこと。また、その人。>と古語辞典にある。ところで、その先追ひの掛け声だが、時代劇の大名行列だと「下に、下に」というのが定番だったようだが、当時の牛車の場合はどうだったのだろう。「大将殿のお通り」などというのは客観的な分かり易さがある気がするが、逆に身分を大っぴらにするのが憚られる場合や慎むべき規範などがあれば都合が悪い。中身を伏せて、「先追ひでございます」が<お先を失礼します>の合図符牒になっていたりすると無難な気もするが、手許に参考資料はない。

「あはれ(つい)、故殿の御けはひとこそ(故衛門督殿の御来訪かと)、うち忘れては思ひつれ(うっかり間違えてしまいそうです)」

とて、泣くもあり(と言って泣く者もいました)。大将殿のおはしたるなりけり(大将殿がいらしたのです)。御消息聞こえ入れたまへり(大将は従者をして御来意を申し入れなさいました)。例の弁の君(いつもの弟君の右大弁か)、宰相などのおはしたると思しつるを(参議殿のお越しかと宮はお思いだったのが)、いと恥づかしげにきよらなるもてなしにて入りたまへり(とても畏まった正装で威儀を正した物腰で大将は邸内にお入りになったのです)。

*母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる(宮は正殿母屋の南廂にお席を用意して大将殿をお通し申し上げます)。おしなべたるやうに(一般の来客のように)、人びとのあへしらひきこえむは(女房が応対申し上げるのでは)、かたじけなきさまのしたまへれば(失礼に当たるように大将

が礼儀正しくしていらっしゃるので)、御息所ぞ対面したまへる(宮の母御息所が対面なさいます)。 *「もやのひさし」は<寝殿の南廂の間。>と注にある。寝殿は南正面。

「いみじきことを思ひたまへ嘆く心は(この度の不幸を残念に存じております気持は)、さるべき人びとにも越えてはべれど(人一倍強く持っておりますが)、限りあれば(親族ならぬ友人ゆえに)、聞こえさせやる方なうて(御夫人の宮様に今まで弔問申し上げる機会が無くて)、世の常になりはべりにけり(通常はこの四十九日明けの今になってしまいました)。今はのほどにも(亡くなる間際にも)、*のたまひ置くことはべりしかば(宮様へのお見舞いを督は私に、仰せ置きなさってございますので)、おろかならずなむ(重く受け止めております)。 *「のたまひ置くこと」は「一条にものしたまふ宮、ことに触れて訪らひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こし召されたまはむを、つくろひたまへ」(三章三段)なのだろう。

誰も*のどめがたき世なれど(誰も何時とも知れぬ寿命ですが)、後れ先立つほどの*けぢめには(私のほうが生き残った以上は)、*思ひたまへ及ばむに従ひて(出来るだけのことはして)、深き心のほどをも御覧ぜられにしがなとなむ(誠意の程をお分かり頂けたらと思っております)。 *「のどむ」は<のどかにする、悠長に構える、悠長に考える、気長に考える>延いては<安心する、油断する>とかもあるだろうか。 *「けぢめ」は<区別>。此処では<役割の違い>だろうか。「後れ先立つほどのけぢめ」は<後先の違い=先に死んだ者と後に残った者の天命>で、「には」は<にあっては=である以上は>。 *「思ひ及ぶ」は<思い付く、考え至る>。「従ふ」は<応じて行動する>。「思ひ及ばむに従ふ」は<自分が考え付くであろう援助をする>で、あなたの求めを待つまでも無く自ら進んで、という被援助者の引け目にまで配慮した言い方のように見えるが、押し付けがましいと思えなくも無い。この言い方が示すその辺の当時の語感の兼ね合いが私には分からず、ただ変な言い方に見えるので、「出来るだけのことはする」という今の標準的な言い方に逃げる。

*神事などのしげきころほひ(祭祀事の公式行事が多い時期で)、*私の心ざしにまかせて(私的な友情にかまけて)、つくづくと*籠もりゐはべらむも(不幸の悲しみに浸って謹慎して出仕申さないのも)、例ならぬことなりければ(親族では無いので慣例に背きますし)、*立ちながらはた(またそういうことですので、その合間に立ち寄るということでは)、なかなか飽かず思ひたまへらるべうてなむ(却って失礼になるかと存じられて)、日ごろを過ぐしはべりにける(今まで伺えませんでした)。 *「神事(かみわざ)」は<朝廷内外で行なわれた神に関する行事。>と古語辞典にある。「朝廷内外で行なわれた」という言い方は、その祭祀事の場所が特定の神社であっても、公式の祭り事として執り行われた儀式である事を前提にしている、かと思う。占いや呪術が天文暦に基づく農耕作業の工程時期を決する、まさに政治本体であった時代に於いて、産業の主軸が農耕だという基本が揺るがない限りに於いて、ある一面では現代よりもはるかに理学自体によって社会が運営されていたと見做せるなら、様式美の追及は誰もが同じ価値観で豊かさを共有出来たことだろう。注には<二月には春日祭、大原野祭、祈年祭などの神事がある。今、三月になった。>とある。 *「わたくしのこころざし」は<私的な友情>らしい。 *「籠もり居」は<家にじっと引きこもっていること。また、その家。籠居(ろうきよ)。>と大辞泉にある。が、此処では喪に服して謹慎すること、であり、それが親族では無い友人の立場では公式には通らない、という発言主旨かと思う。と言っても、源君は藤原姫を娶っているので、藤君の義理の弟であり、血縁ではないものの広義の親族ではある訳だが、源君の妻の藤原姫が腹違いということと、既に別の家を構えているということが、一線を画すのかも知れない。それでも、その妻の藤原姫は一定期間喪に服したかも知れず、つまりは当時の世相事情が私には分からない。その所為かこの源君の発言文は、こういう場面での挨拶として、想定される内容と全く違う訳では無いが、意外に分かり難い言い回しだ。概して与謝野

訳文が分かり易いが、それでも相当に分かり難い。*「立ちながら」は注に<『集成』は「お庭先で失礼いたしますのでは、これまた。「立ちながら」は上にあがらないこと。神事に仕出する身として、その時期に訪問しても、死の穢れに触れるのを避けねばならない、という意」と注す。>とある。

大臣などの心を乱りたまふさま(大臣などが悲嘆に暮れていらっしゃることを)、見聞きはべるにつけても(見聞き致しますにつけても)、親子の道の闇をばさるものにて(子が親に先立つ不幸の悲しみは推して余りありますが)、かかる御仲らひの(こちらには御夫婦仲での)、深く思ひとどめたまひけむほどを(深く思い残しなさっている事がどれほどあるかと)、推し量りきこえさするに(ご推察申し上げますと)、いと尽きせずなむ(まことに心痛に堪えません)」

とて(と言って)、しばしばおし拭ひ(しばしば涙を押し拭い)、鼻うちかみたまふ(鼻をかみなさいます)。あざやかに気高きものから(際立って気高い一方で)、なつかしうなまめいたり(親しみがあって優美です)。

[第二段 母御息所の嘆き]

御息所も鼻声になりたまひて、

「あはれなることは、その常なき世のさがにこそは(はかない寿命は無常の世のしるし)。いみじとても(無念とは言え)、またたぐひなきことにやはと(よく在る事と)、年積もりぬる人は(年寄りの私は)、しひて心強うさましはべるを(敢えて冷静に考えておりますが)、

さらに思し入りたるさまの(督の死をいっそう思い込んでいらっしゃるような宮様が)、いとゆゆしきまで(不安に思えるほど)、しばしも立ち後れたまふまじきやうに見えはべれば(今にも後を追いなさるかねないように見えますので)、

すべていと心憂かりける身の(不幸な定めのはは)、今までながらへはべりて(今まで生き永らえて)、かくかたがたにはかなき世の末のありさまを見たまへ過ぐすべきにやと(このように情けない末世のありさまを見なければならぬのかと)、いと静心なくなむ(本当に心穏やかではいられません)。「すべていと心憂かりける身」は注に<『完訳』は「以下、娘の不幸をのみかみしめながら、わが身を回顧。朱雀院の更衣として苦悩が多かったか」と注す。>とある。そのように当時の読者は了解したのだろうか。しかし、御息所の苦勞については特に何も示されておらず、後宮暮らしが嫉妬塗れの様相を呈することは、日常的に恒常的にそういう構造が競争原理に則って、むしろ機構企画さえしているので、此処での語用は末世思想に基づいた一般的な厭世観に立った、というか、そういう言い方が流行という当時の貴族社会での普通の日常挨拶と見て良いのではないか。「心憂し」は<辛く思う>。「かりける」は<～くありける＝～というように(昔の因縁で)運命付けられた>と読めそう。軽口とまでは言えないが、「いと静心なくなむ」に色をつけたくらいの言い方なのだろう。まあ、女房では絶対に言えない、大将殿に親しみを示した言い方、だったのかも知れない。

おのづから近き御仲らひにて(自然に、大将殿は衛門督と親しい御仲だったので)、聞き及ばせたまふやうもはべりけむ(この結婚についての経緯はお聞き及びのことかとも存じます)。初めつ方より(初めは)、をさをさうけひききこえざりし御ことを(私は少しも受け入れ申し上げていなかった御縁でしたが)、大臣の御心むけも心苦しう(藤原大臣の熱心な御申し入れも勿体無く)、

院にもよろしきやうに思し許いたる御けしきなどはべしかば(朱雀院におかれても良い御縁のようにお考えで、お許しの御意向でございましたので)、さらばみづからの心おきての及ばぬなりけりと(この上は私が判断するに及ばないことと)、思ひたまへなしてなむ(思うことに致しまして)、*見たてまつりつるを(督を婿殿にお迎え申し上げたのですが)、*「見たてまつりつる」は注に<『集成』は「お世話申し上げたのですが。柏木を夫として迎えた宮をお世話した、の意」と注す。>とある。実勢としてはともかく、家格としては宮家が公卿の子息を婿に迎え入れた、という形が、少なくとも宮家側としての体面だった、のかと思われる言い方、に見える。

かく夢のやうなることを見たまふるに(このように夢のようなはかない出来事を目に致しまして)、思ひたまへ合はすれば(思い合わせますと)、*みづからの心のほだなむ(私自身の考え方というものを)、同じうは強うもあらがひきこえましを(どの道明日をも知れぬ人生なら強く主張して結婚に反対申し上げて置けば良かったのか)、と思ひはべるに(と思えば)、なほいと悔しう(今でもとても悔やまれました)。それは(それにしても)、かやうにしも思ひ寄りはべらざりきかし(こんなことになろうとは思っても居りませんでした)。*「みづからの心のほど」の中身は自責の念として下に語られるようだ。

*皇女たちは(内親王たちは齋院や齋宮をお仕え申すべき神聖な存在なので)、*おぼろけのことならで(余程のことではなければ)、*悪しくも善くも(縁の良し悪しに関わらず)、かやうに世づきたまふことは(結婚して世俗に塗れなざるのは)、え*心にくからぬことなりと(とても感心できないことだと)、古めき心には思ひはべしを(私のような古風な老人には思えるのですが)、*「皇女たちは」の「みこ」という響きに、御息所は<神聖さ>を込めているのだろう。以下の文意から、そう読むべきものに思える。「神聖さ」は、そこに各個人が託す思いは一様ではないとしても、人間集団の狂信性を体現する特異性ではありそうで、それは政治力には不可欠だ。というか、むしろ圧倒的な政治力を有した者が放つ常人を超えた威厳みたいなものが根源にあって、後はその面影に浸る陶醉感に過ぎないのかも知れないが。であれば、政治的に利用され得る危険な存在にも見える。*「おぼろけのことならで」の「で」は、打消しの助動詞「ず」に接続助詞「て」がついたもので<～でなければ>という言い方。*「悪しくも善くも」は分かり難いが、内親王を神聖な存在とする価値観からすれば、例えその結婚が良縁であろうと、くらしい言い方になるのかも知れない。*「心憎し」は<良く物事の由緒を心得ていて文句の付けようが無く妬ましいほど感心する>みたいな語感。

いつかたにもよらず(宮様は未亡人となられて、世俗とも神聖とも着かない)、中空に憂き御宿世なりければ(中途半端な辛い御宿命ですので)、何かは(今さらは何も)、かかるついでに煙にも紛れたまひなむは(この際に督の後を追って煙に紛れなさっても)、この御身のための人聞きなどは(宮御自身の外聞などに)、ことに口惜しかるまじけれど(特に障りは無いでしょうが)、

さりとても(でも私は)、しかすくよかに(そんなに型通りに)、え思ひ静むまじう(納得できそうもなく)、悲しう見たてまつりはべるに(悲しく宮の様子を拝し申し上げておりましたが)、いとうれしう(まことに嬉しいことに)、浅からぬ*御訪らひのたびたびになりはべめるを(御丁寧な御見舞品を度々頂きましたようで)、有り難うもと聞こえはべるも(有難く御礼申し上げますが)、*「御訪らひのたびたびになりはべめるを」は注に<『集成』は「自身の訪問ははじめてだが、今まで何度も弔問の使者がさし向けられていた趣」と注す。>とある。

さらば(それらは)、かの御契りありけるにこそはと(あの督とのお約束があなた様との間にあったことだったからなのか)、思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど(然程に熱心とも見えなかった督の宮への御愛情なれど)、今はとて(死に際に)、これかれにつけおきたまひける御遺言の(だれかれに申し置き付けなされた御遺言が)、あはれなるになむ(胸に染みまして)、*憂きにもうれしき瀬はまじりはべりける(悲しさの中にも嬉しい時が混じってきます)」 *「憂きにもうれしき瀬はまじりはべりける」は<「うれしきも憂きも心は一つにて別れぬ物は涙なりけり」(後撰集雑二一一八 読人しらず)>と参照指摘がある。ただ、「瀬(せ)」という音には、早く過ぎ去るもの、短時間の物事、という語感があるので、「瀬はまじる」だけで<少しはある>という表現にはなっていそう。

とて(と言って)、いといたう泣いたまふけはひなり(とても痛々しくお泣きになっている様子です)。

[第三段 夕霧、御息所と和歌を詠み交わす]

大将も、とみにえ*ためらひたまはず(大将も直ぐには気を取り直しなされません)。 *「ためらふ」は現代語では<躊躇する、迷う>だが、この物語では良く<病状が小康を得る>の意味で使われている。此处でも<平静に戻る←気を取り直す←心を鎮める>という語用らしい。どうやら「ためらふ」は、動詞「たむ(溜む、貯める)」の連用形「ため」に形態保持を示す助動詞「り」の未然形「ら」がついたものに、反復を示す助動詞「ふ」が付いて<保留している>という意味になった語らしく、その意がいろいろな場面に応じて語用されるのだろう。

「あやしう(珍しいほど)、いとこよなく*おやすけたまへりし人の(それはこの上なく大人でいらした督が)、*かかるべうてや(このように早世の運命だったからなのか)、*この二、三年のこなたなむ(ここ二、三年この方)、いたうしめりて(とても物静かで)、もの心細げに見えたまひしかば(何となく元気が無いようにお見えでしたが)、 *「おやすく」は大辞泉に<成長する。成人する。>または<大人ぶる。ませる。>または<じみである。老けた感じである。>と語用説明がある。また、古語辞典には<「およ」は「古い」の転。「すく」は不詳。清濁も不詳。>ともある。学会権威を以て不詳とされる語に何の根拠も示しえないが、「およ」は「古い」の転、と言うよりは、「及ぶ」の縁語のように見える。と言うか、「老ゆ」も「及ぶ」も「オ」または「オーイ」を語幹とする縁語で、「オーイ」は声や手が延びて向こう岸に届いた、即ち一定基準に達した、という語感というより音感のような気がする。もしかすると「長じるー長むー治む」にも繋がるかと思ったら、「長む、治む」は「をさむ」という語で「居す、食す(をす)」などの縁語らしい。ただ、「長し(をさし、大人びている)」や「幼し(をさなし)」という語の「おゆ(老ゆ)」や「おやすく」や「おす(押す)」や「おふ(生ふ)」などの語との重複意を見ると、「お」と「を」との相違に興味を湧き、何となく「お」が能動で「を」が受動の気もする。いや、今はこれ以上の詰め様はない。 *「かかるべうてや」は<かかるべきにてや(是が必然だったのか)>ではなく<かかるべくありにてや(このように早世する運命だったからなのか)>。 *「この二、三年のこなたなむ」は対象をぼやかした源君の気配りなのだろう。督と女三の宮との密通は昨年の四月上旬、御禊の日の前夜のことであり、督が御所への出仕も出来なくなったのは、若菜下巻十章二段に「かの御心にも思し合はせむことのみみじさ、など、やすからず思ふに、心地もいと悩ましくて、内裏へも参らず」とあって、恋文が五月に源氏殿に見つかったと侍従に知らされた後の六月くらいからのようだ。それでも昨年十月には、この二の宮に付き合って朱雀院五十賀に参列し、十二月には六条院の試楽にも出掛けたが、その試楽以降に容態が悪化し、遂にこの二月に亡くなった。だから、客観的に際立った異変というのはこの十ヶ月くらいのものかと思うが、それは誰の目にも分かる異変で、特に親しい源君から見れば、それらしい予兆は以前からあった、ということを窺わせる言い方で、こういうのは多くの場合、異変の原因かどうかはさて置いて、周辺事

情を話すことで故人を偲ぶ、という意味合いになっていて、一種の慰めだ。が、蹴鞠事件は七年前であり、昔話なら更に遡れる。もしかすると、源君は三年前からの藤君の変化を気にしていた、ということは本当にあったのかも知れない。それは正に、督と女二の宮との結婚話が進み始めた頃だ。三十歳になるのに藤原宗家の惣領が独身では具合が悪いと、藤君も女三の宮は諦めて、身を固めるべく観念したのだろう。ただし、藤君は自分の社会的立場上の責務としても、その身分に見合う相手として内親王を娶りたい、と藤原殿に訴えた、という可能性は高い。祖父大臣に倣って大宮級の女を得たい、と言えば、藤原殿も「良く言った」と大乗り気になったことだろう。身を固めて落ち着く、というのは独身時代を知る旧友から見れば、大人しくなる変化に違いない。しかし、それが早世と結びついたのでは、まるで結婚がいけなかったかのような話になってしまうので、言い方には注意が必要だろうが、普通は、元気な時の馬鹿話は相当に下品でも、いやむしろ下品なほど、故人の人柄が偲ばれる。

あまり世のことわりを思ひ知り(あまりに世の無常を思い知り)、もの深うなりぬる人の(深く考え込んだ人が)、澄み過ぎて(心が静まりすぎて、感情の起伏を失い)、かかる例(そうなると)、*心うつくしからず(咄嗟の判断が鈍って)、かへりては(却って)、*あざやかなる方のおぼえ薄らぐものなりとなむ(的確な衛士指導力が弱まることになって)、常に*はかばかしからぬ心に諫めきこえしかば(私が常に僭越ながらご注意申し上げますと)、心浅しと思ひたまへりし(督は私を目先に捉われて、考えが浅いと御思いのようでした)。*「心うつくし」は<素直な気持>とあるが、「澄み過ぎ」の反面を考えれば<融通が利かない、臨機応変で無い>だから、此处では<素直>というよりは<反応=咄嗟の判断>と見て置く。*「あざやかなる方のおぼえ」の「おぼえ」は腕に覚えありの「おぼえ」で<身に着いた能力>なのだろう。で、衛門督が身に着けなければならない業務能力と言えは<武官統率力=舍人掌握>かと思う。*「はかばかしからぬ心に」は<良く分かりもしないで→出過ぎたことで失礼ながら→僭越ながら>。

よろづよりも(何よりも)、人にまさりて(誰よりも)、げに(本当に)、かの思し嘆くらむ御心の内の(どんなに深くお悲しみかと奥方でいらした宮様のお気持ちを)、かたじけなけれど(恐れながら)、いと心苦しうもはべるかな(まことにお労しく存じます)」

など(などと大将源氏君は)、なつかしうこまやかに聞こえたまひて(親しく情感込めてお話しなさって)、ややほど経てぞ出でたまふ(長めに時間を過ごしてからお帰りになります)。

かの君は(故衛門督兼権大納言藤原君は)、*五、六年のほどのこのかみなりしかど(源氏君よりは五、六歳年上だったが)、なほ、いと若やかに、なまめき(それでもとても若々しく色気があって)、*あいだれてものしたまひし(お優しくいらっしやいました)。*「五、六年のほどのこのかみなりし」は、ほぼ年齢の明示だ。源君が27歳なので、藤君は32,3歳ということになり、推定と言うよりは確定で33歳と見ておこう。そうすれば分かりやすいし、既に故人であってみれば、享年33で落ち着きたい。*「あいだる」は動詞で<甘える>または<なよやかである>と古語辞典にあるが、語意ははっきりとはしていないようだ。ただ、辞書の前項に形容詞「あいだちなし」が<愛嬌が無い、つれない>の意と掲載されているので、その類語で<愛嬌がある、親しみやすい>あたりを考えてみたが、下の源君の形容に「ををし(雄々し、男々し、男らしい)」という表現があり、とは言え、その対比としても<女々しい>は言い難いので<優しい>としてみた。そういえば、藤君は次男に比べて少し神経質みたいな言い方をしていた場面もあったかと思うが、玉鬘に恋文を寄せた時などは茶目っ気も出していたようで、当たり前だが第一線の公人であってみれば、場面に応じていろいろな顔を持っていたらうし、もとより藤原家の血筋なら派手で遊び好きなのは基本だ。思えば、密通の件を除いても、督が六条院に対して少し気が張っていたらしいのは、藤原氏惣領としての体面もあっただろうし、やはり藤君が次男よりは朱雀院に近

しい役割を負っていたからかも知れない。ただ、源君には源氏殿よりははるかに親近感を持っていたのだろう。何しろ源君は藤原家育ちだし、従兄弟だし、義理の弟でもある。

これは(こちらの源氏君は)、いとすくよかに重々しく(とても真面目ぶって重々しく)、男々しきけはひして(男らしい態度で)、顔のみぞいと若うきよらなること(顔立ちだけがとても若くて美しいのが)、人にすぐれたまへる(抜きん出ていらっしゃいます)。若き人びとは(宮家の若女房たちは)、もの悲しさもすこし紛れて見出だしたてまつる(喪中の物悲しさも少し忘れて浮かれ気味に大将殿をお見送り出し申し上げます)。

御前近き桜のいとおもしろきを(前庭の桜がとても見事なのを)、「*今年ばかりは」と(ある古今集の歌に準えようと)、うちおぼゆるも(口ずさみ掛けたが)、いまいましき筋なりければ(その歌筋が、今年だけは故人を悼んで喪服の墨色で咲けと桜に語りかける、という奥方に出家を勧めるような不都合なものだったので)、*「今年ばかりは」は<「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」(古今集哀傷-八三二 上野岑雄かうづけのみねを)>と参照指摘がある。「古今和歌集の部屋」サイトを頼ると、この歌は詞書に「堀川のおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける」とあって<藤原基経が 891 年一月に亡くなった時のもの>と解説されていた。そして、この詞書は一つ前の 831 番「空蟬は 殻を見つとも ながさめつ 深草の山 煙だにたて」(僧都勝延)と同じとあり、この 831 番の歌は一章三段の「殻のやうなるさまして」という言い回しの引歌として参照指摘されていた。作者は衛門督の死について読者に藤原基経の死を喚起させる意図があるらしい。ただ、基経は藤原北家の隆盛を導いた大物であり、藤君を基経に準えるというのではなく、基経の死によって表立った菅原道真と藤原時平との対立を、物語の波乱含みの展開の示唆として興味付けようとしたのか、マ、私は史実にも疎いので良く分からない。

「*あひ見むことは」と口ずさびて(桜に因んだ歌で出会いを讃える古今集の中にある別の「あひ見むことは」という文句を口ずさんで)、*「あひ見むことは」は<「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり」(古今集春下-九七 読人しらず)>と参照指摘がある。廻る季節と言いながら出会いは何時も時の運、なんて今でも使えるキャッチコピーみたい。

「時しあれば 変はらぬ色に 匂ひけり 片枝枯れにし 宿の桜も」(和歌 36-05)

「時を忘れず咲く花も亭主なくして寂しそう」(意識 36-05)

*わざわざ「今年ばかりは」と前振りしただけあって、古今集 832 番の「野辺の桜し心あらば」を踏襲した詠み出しになっている。また、「御前近き桜のいとおもしろきを」の前振りは、本章一段に「御前の木立いたう煙りて、花は時を忘れぬけしきなるを眺めつつ、もの悲しく、さぶらふ人びとも、鈍色にやつれつつ」とあった大将の来着前の物寂しげな一条宮邸を思い出させ、この退出時に「若き人びとは、もの悲しさもすこし紛れて見出だしたてまつる」と大将が春を連れて来たように少し日が射した情景を対比させて、この歌の「匂ひけり」の色気を際立たせている、という心憎い演出。というか、あざといほどの厚化粧に見えなくもない。だから、敢えて次のようにさり気無さを言わずにはいられない、みたいな。

わざとならず誦じなして立ちたまふに(さり気無く源君が一句詠んで立ち去ろうとなさると)、いととう(即座に)、

「この春は 柳の芽にぞ 玉はぬく 咲き散る花の 行方知らねば」(和歌 36-06)

「柳涙の鈴なりに花の咲くのも見えません」(意識 36-06)

*「柳の芽にぞ玉はぬく」は、柳の芽枝に露が鈴なりに連なっているように涙が止め処ない、という言い方らしい。「柳の芽にぞ」の葉枝の強調には桜花を愛でる余裕が無いという恨みも籠もる、「玉はぬく」の言い回しについては<「より合はせて泣くなる声を糸にして我が涙をば玉にぬかなむ」(古今六帖四-二四八〇 伊勢)>が参照指摘されている。水玉を数珠繋ぎにして糸で貫く、という理屈はこの下敷歌がないと「玉はぬく」だけでは舌足らずだ。「咲き散る花の行方知らねば」は<督が散った後の宮の先行きが不安なので>の「宮」を「花」に置き換えただけの平易な喩えだ。でも、即興性はその場の座に即した歌詠みだから、それ自体でとても記録価値が高い。

と聞こえたまふ(と御息所は返歌申し上げます)。いと深きよしにはあらねど(然程深い趣は無い歌だが)、今めかしう(軽やかで)、かどありとは言はれたまひし更衣なりけり(才長けたと言われなされた更衣ならではの即答ぶりです)。「げに(なるほど)、めやすきほどの用意なめり(一目置かれる機転だ)」と見たまふ(と大將は御息所を御思いなさいます)。

[第四段 夕霧、太政大臣邸を訪問]

致仕の大殿に(ちじのおとどに、藤原大臣邸に)、やがて参りたまへれば(大將はそのまま参上なさると)、君たちあまたものしたまひけり(弟君たちが大勢迎えに出ていらして、)。

「こなたに入らせたまへ(とちらへどうぞ)」とあれば(と案内されたので)、大臣の*御出居の方に入りたまへり(父大臣の御座敷にお入りになりました)。*「出居(いであ)」は<客に対面するために廂に設けた座。客間。>と古語辞典にある。

ためらひて対面したまへり(大將はどう接したものと迷いながら着座なさいました)。古りがたうきよげなる御容貌(藤原殿は老け込まない美しいお顔立ちが)、いたう瘦せ衰へて(ひどく痩せ衰えて)、御髭などもとりつくろひたまはねば、しげりて(お髭なども手入れなさらないので伸び放題で)、親の孝よりも(親の死を悼む子の服喪よりも)、けにやつれたまへり(一段と深くお悲しみです)。

見たてまつりたまふより(お会い申した途端に)、いと忍びがたければ(同情が込み上げて)、「あまりにをさまらず乱れ落つる涙こそ、はしたなけれ(みだりに泣いては見つともない)」と思へば(とあって)、せめてぞもて隠したまふ(大將は袖で涙を御隠しなさいます)。

大臣も(おとども、藤原殿も)、「取り分きて御仲よくものしたまひしを(特に仲良くしていらっしやっただのになあ)」と見たまふに(と大將を御覧になると)、ただ降りに降り落ちて(ただ涙涙で)、えとどめたまはず(一頻り止めようもなく)、尽きせぬ御事どもを聞こえ交はしたまふ(思いの尽きない督の思い出話を語り合いなさいます)。

一条の宮に参でたりつるありさまなど聞こえたまふ(そして大將は、一条宮邸に見参申したことをお話しなさいます)。いとどうし(父大臣は朱雀院との縁を託した長男の不憫を思うと、堰を

切ったように)、*春雨かと思ゆるまで(春の嵐雨かと思えるほどに)、軒の雫に異ならず(軒を伝い落ちる雫然乍に)、濡らし添へたまふ(大泣きなさいます)。 *「春雨か」とは<『完訳』は「「ただ降りに降り落ちて」とある縁で、涙を季節の雨と見立てた」と注す。>と注にある。

*畳紙に、かの「柳の芽にぞ」とありつるを、書いたまへるをたてまつりたまへば(大将が懐紙に御息所の歌を書き留めてあったものを殿に御覧に入れると)、「目も見えずや」と、おし絞りつつ見たまふ(大臣はその歌が、柳の芽露のように涙して花が見えない、とあったのを、自分は涙でその‘柳の芽’さえ見えないと言って涙で読めない文字を、目蓋で涙を絞り切りながら目を凝らしてお読みになります)。 *「畳紙」は「たたみがみ」と読みがある。「たたみがみ」は「たたうがみ」に同じとあり<折りたたんで懐中に持ち歩く紙。鼻紙、または歌の詠唱に用いられた。>と古語辞典にある。注には<夕霧は御息所の返歌を自分の畳紙に書付けておいた。>とあり、であれば、「げにめやすきほどの用意なめりと見たまふ」(前段末)とあったのは、源君がその歌を書き留めた、という描写だったのかも知れない。

うちひそみつつぞ見たまふ御さま(顔を歪ませて歌を御覧になる大臣のお姿は)、例は心強うあざやかに、誇りかなる御けしき名残なく、人悪ろし(いつもは気丈ではっきりして誇り高い御態度の名残りもなく身窄らしい)。さるは(それにこの歌は)、異なることなかめれど(然程の出来栄えではなかったが)、この「玉はぬく」とある節の(その「玉はぬく」という言い回しが)、げにと思さるるに(実感されて)、心乱れて(共振作用で)、久しうえためらひたまはず(暫く涙の振幅が収まらなかったのです)。

「君の御母君の隠れたまへりし秋なむ(君の御母君が亡くなった秋には)、世に悲しきことの際にはおぼえはべりしを(この世の悲しみの極みと思いましたが)、女は限りありて(女の世界は家の中に限られていて)、見る人少なう(知る人が少なく)、とあることもかかることもあらはならねば(公務の付き合いで話題になることも無いので)、悲しびも隠ろへてなむありける(悲しみも隠す事が出来ました)。

はかばかしからねど(しかし我が子は、ふつつかながら)、朝廷も捨てたまはず(帝もお認め下さり)、やうやう人となり(だんだん一人前になって)、官位につけて(つかさくらみにつけて、昇進するに連れて)、あひ頼む人びと(頼って来る者も)、おのづから次々に多うなりなどして(自然と次々に多くなったりして)、おどろき口惜しがるも(その死を驚き残念がる者も)、類に触れてあるべし(各方面にいるようです)。

かう深き思ひは(ただ、この私の深い悲しみは)、その大方の世のおぼえも(そういう世間の評価とか)、官位も思ほえず(官位に関わらず、)。ただことなることなかりしみづからのありさまのみこそ(単に健康で暮らしていたありのままの暮らしぶりこそが)、堪へがたく恋しかりけれ(堪らなく恋しいのです)。何ばかりのことにてか(一体どうすれば)、思ひさますべからむ(この気持を鎮められるでしょう)」

と(と藤原殿は)、*空を仰ぎて眺めたまふ(空を仰いで嘆息なさいます)。 *「空を仰ぎて眺めたまふ」は<「大空は 恋しき人の 形見かは 物思ふごとに ながめらるらむ」(古今集恋四、七四三、酒井人真)>が下敷き歌だと注釈で指摘してあるようだが、何故か此処の注釈はどうしたらこんなに分かり難い書き方が出来るのか

不思議なほど分かり難く、多分その心算の注なのだろう、としか言い様がない。で、早速に「古今和歌集の部屋」サイトに頼ると、この歌は“ながめらるらむ”は「ながめ+らる+らむ」で、「らる」は自発を表わす助動詞、「らむ」は前半の“かは”という反語を受けて、疑問に思っていることの原因がわからない、という感じを表わす助動詞である。「大空を眺める」ということと「形見を眺める」ということを、反語を使いながらもうまく結び付けている歌であると言える。>と解説されている。で、「ながむ」の<嘆く>と<眺める>という複意に引っ掛けて、大臣が<途方に暮れて嘆いた>のを「空を仰ぎて眺めたまふ」という言い回しにすることで、下の<外の景色を眺めると>という語りに洒落る、と作者が作為した、のだということ、注釈は言っているのだろうか。しかし、「ながむ」の<嘆く>と<眺める>という複意を洒落るとするのは、既に何度も出て来ているし、何度もと言うより「ながむ」という語に多くの人が複意の印象を持つこと自体が、この語の特徴なので「庭を眺める」という言い方に<思い悩む>という意味を持たせないためには、それらしい文脈にするとか別の言い方にするとかが必要なほどだ。だから引用指摘は語用の注意喚起ではなく、この場面で作者がこういう言い方をした説明として、その情緒をより楽しむために工夫されたものなのだろう。であれば、読者は参照歌を脇見しながら、なるほど作者はこういう歌をしっかり意識して、こういう言い回しで書いているのか、と感心すれば良い筈で、それを妨害するかの注釈の分かり難さは本当に変だ。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ(夕暮れの茜空に雲がねずみ色に霞かかった庭の葉桜の枝を目に止めて、大臣は今になって桜が散り終わってしまっていることに気付きなさいました)。「夕暮の雲のけしき」は特別な言い方ではないようにも見えるが、敢えてこの言い方をする意図がある、ということはあるのかも知れない。注には<「夕暮の雲の気色を見るからに なかめしとそおもふ 心こそつけ」(新古今集雑下、一八〇六、和泉式部)>が参照指摘してある、ように見える。「見るからに」は現代語でも<見た目からして如何にも～らしく見える>という語用だ。「眺めじとぞ思ふ(見ないで置こう、と、嘆くのは止めよう、の複意)」とあるので、「～」は<嘆かわしい>だ。

この御畳紙に(大臣はその御畳紙に、こう詠みます)、

「木の下の 雫に濡れて さかさまに 霞の衣着たる春かな」(和歌 36-07)

「散った桜の見事さに後れ先立つ涙知る」(意識 36-07)

*注に<大臣の歌。親が子の喪に服すことを「さかさまに」と言った。「霞の衣」は喪服を喩える。「木の下の雫」は亡き子を偲ぶ涙の意をこめる。>とある。前振りが葉桜の情景なのだから、散った桜の花びらに覆われた庭を上下反転の「さかさまに霞の衣着たる春かな」と詠んでいるのだろう。光景は美しい気がするが、声にした音は綺麗に響かない文句だ。「木の下の雫に濡れて」の発想は、この帖で多用される「後れ先立つ」という言い回しの下敷き歌として二章一段でも参照指摘のあった「末の露もとの雫や世中の後れ先立つためしなるらむ」(古今六帖、露・和漢朗詠集、無常、良僧正)に習ったものに見える。だから、「木の下の」の読みは「このしたに」とあるが、「このもとの」も捨て難い。歌詠みの理屈も詠み込む情景も着眼点は良いが、音に情が乗らないで、肝心の歌の出来栄が今ひとつ、というのは如何にも藤原殿らしい、と言えるのだろうか。

大将の君、

「亡き人も 思はざりけむ うち捨てて 夕べの霞 君着たれとは」(和歌 36-08)

「散った後から春霞、父君がまさか着ようとは」(意識 36-08)

*注に<夕霧の唱和歌。「亡き人」は柏木、「君」は父の大臣をさす。「着る」はそのまま用いるが、「霞の衣」を「夕の霞」と趣向を変える。>とある。「打ち捨つ」は<放り捨てる→散り去る>の語感で「夕べの霞」に見える葉桜の風情を詠み、多くは出家などで<家族を見捨てる→先立つ>の語感で「夕べの霞」を<僧衣=喪服>に見立てる、のだろうか。「霞の衣」が喪服を意味するなら、「霞」だけでもそう読ませることが出来る、ということになるのかも知れない。雰囲気としては伝わる気もするが、詰めた語用としては「夕べの霞」は情景が勝っているように思える。また、今の時点でこの「打ち捨つ」に面倒な事情の示唆を込めようとしたとは思えず、散漫な歌の印象だ。どうやら、この歌詠みの主旨は「君」と大臣を立てることにあるようで、雰囲気を損なわずに字数をまとめれば出来上がりみたいな、即興性こそが大事な、御息所以上に浅くて雑な詠み方に見える。「着たれ」は「着る」の連用形に状態説明の助動詞「たり」がついたものの已然形で<着ている状態になる>としてみる<くらいの言い方。厳密な文法整理は専門家に任せたいが、この物語でのこれまでの語用で見ると、已然形は基本的に仮定構文に於いて論理的条件提示に使われる語法のように、>「ざりけむ」の過去仮定文では、「着たれとは」は<着ることになるとは>。

弁の君、

「恨めしや 霞の衣 誰れ着よと 春よりさきに 花の散りけむ」(和歌 36-09)

「誰が着ようとは後先の違う喪服は恨めしい」(意識 36-09)

*注に<柏木の弟の弁の君の唱和歌。大臣の「霞の衣」「着る」「春」をそのまま用いるが、夕霧の「君」は「誰」と趣向を変える。「花」に柏木を喩える。>とある。「誰れ着よと」の「着よ」は「着る」の命令形。だが、命令形という文法呼称は少し舌足らずなのでないか。この語法は強調法かと思う。強調とは話者が何らかの意図を持ってする発言だ。已然形が客観的な論理条件を提示するのに比して、命令形は主観的な価値条件を提示する、ように思う。だから基本は仮定構文での語用なのだが、その条件に対する良し悪しの思惑は別途に示されることが多く、当該条件文に於いてはその<～であれば望ましい、～であれば嘆かわしい>の評価部分が省略されることにより、言い切り文型となって、仮定条件がそのまま強要や促進や禁止や願望などを示す言い方になった、のではないか。厳密な定義はともかく、この「着よ」は<着るとなると(恨めしい)>で、「誰れ着よと」は<誰が着ることになっても=誰が着ようとは>という言い方だろう。大将は督は勿論、この弁君よりも年下だろうが、身分上の付き合いとしては衛門督より同等以上であり、共に死なんと語り合った同輩であれば、義理の弟ながら大将も後先を違えて衛門督に先立たれた、とも言えるので、そういう意味合いでの弁君の気遣いと言うか取り成し。源君の大臣へのヨイシヨに家族として気が引けたみたいだ。

*御わざなど、世の常ならず、いかめしうなむありける(御法要は非常に立派に執り行われました)。大将殿の北の方をばさるものにて(大将殿の奥方がその際に妹君として深い哀悼の念を示されたのは言うまでもなく)、殿は心ことに(大将殿も特別に)、*誦経なども(誦経の謝礼寄付なども)、あはれに深き心ばへを加へたまふ(深い友情を示して加贈なさいます)。*「わざ」は此处では文脈からして<仏事、法要>を指すらしい。*「誦経(ずきやう、じゅきやう)」は<経文を声を出して読むこと。僧に読経させること。>であり、更に<誦経の布施。誦経または祈祷の礼として贈る施し物。装束や布帛など。誦経物。>と古語辞典にある。

[第五段 四月、夕霧の一条宮邸を訪問]

かの一条の宮にも(大将は未亡人の一条宮邸にも)、常に訪らひきこえたまふ(いつもお見舞い品を送り申しなさいます)。卯月ばかりの*卯の花は(四月には卯の花が)、そこはかとなう心地よげに(気取りもなく気持良さそうに)、一つ色なる*四方の梢もをかしう見えわたるを(一面に白く咲いて宮邸の四方を囲む生垣の緑も鮮やかに見渡せるが)、もの思ふ宿は(悲しみに沈む邸内は)、よろづのことにつけて静かに(その初夏の輝きにも心浮き立つこと無く)、心細う暮らしかねたまふに(生活費の心配もある暮らしをしていらっしやる所に)、例の渡りたまへり(いつものように颯爽と大将がお見えになりました)。*「卯の花」はウツギのこと、またはウツギの花のこと、とある。ウツギは「空木」と表記するらしくユキノシタ科の落葉低木。山野に自生。高さ 1、2m。葉は狭長楕円形で対生する。幹は中空。梅雨の頃、白色の五弁花を円錐花序につける。垣根などに植え、材は木釘(きくぎ)・楊枝(ようじ)などにする。うのはな。>と大辞林にある。*「四方の梢(よものこずゑ)」は宮邸の四方を囲むウツギの生垣なのだろう。

庭もやうやう青み出づる若草見えわたり(庭も次第に青みがかって若草が見渡せて)、ここかしこの砂子薄きものの隠れの方に(あちらこちらの敷き砂が少ない所の物陰に)、蓬も所得顔なり(ヨモギもはびこっている)。前栽に心入れてつくろひたまひしも(衛門督が前庭の植え込みを熱心に手入れなさっていたのも)、心にまかせて茂りあひ(延び放題で茂り合っ)、一村薄も頼もしげに広がりて(一群れのススキも立派に広がって)、虫の音添へむ秋思ひやらるるより(虫の音が加わるであろう秋の風情が思われたので)、いともあはれに露けくて(やけに感傷的になって涙がちに)、分け入りたまふ(大将は寝殿にお進み為さいます)。

伊予簾かけ渡して(寝殿は日除けの竹簾が掛け渡してあって)、鈍色の几帳の衣更へしたる透影、涼しげに見えて(喪中用の灰色の几帳の帷子を夏用の薄手に衣替えしてある室内の様子が簾越しに涼しげに見えて)、よき童女の(器量の良い童女の)、こまやかに鈍ばめる汗衫のつま(濃いねずみ色の飾り着の裾端や)、頭つきなどほの見えたる(髪形のなどが少し見えて)、をかしかれど(風情があるが)、なほ目おどろかるる色なりかし(やはり喪中を改めて気付かされる色合いです)。「伊予簾(いよす、いよすだれ)」はく伊予国上浮穴(かみうけな)郡露峰(つゆのみね)産の篠竹(しのだけ)で編んだ上等のすだれ。>と大辞泉にある。商品名と言うよりは今の日除けの竹すだれを、室内の御簾と区別するために使った語なのだろう。でも、当時の流行物だったのかも知れない。

今日は簀子にみたまへば(今日は縁側にお座りになるので)、茵さし出でたり(座布団が出されました)。「*いと軽らかなる御座なり(余りに簡素な御接待です)」とて(と言って女房たちは)、例の(いつものように)、御息所おどろかしきこゆれど(御息所にお相手をお勧め申し上げるが)、このごろ、悩ましとて寄り臥したまへり(最近では体調が優れないということで御息所は横になっていらっしやいました)。*「いと軽らかなる御座なり」はく女房の詞。>と注にある。

とかく聞こえ紛らはすほど(女房が雑談で場を繋いでいる間)、御前の木立ども(前庭の木立が)、*思ふことなげなるけしきを見たまふも(何も思い悩むことなさそうに青々と生い茂っているのを御覧になるのも)、いともあはれなり(大将には人の一生のはかなさが思われる風情です)。*「思ふことなげなるけしき」は注にく擬人法。木立が何の悩みもなさそうに生い茂る風情を夕霧がご覧になるにつけても、の意。>とある。

柏木と楓との(柏の木と楓の木とが)、ものよりけに若やかなる色して(他より特に若々しい緑の葉を)、枝さし交はしたるを(枝を差し交わすように近接して付けているのを)、

「いかなる契りにか(どういう前世の縁でか)、末逢へる頼もしさよ(葉先が触れるほどの頼り合える仲だな)」

などのたまひて(などと仰って)、忍びやかにさし寄りて(大将はそっと女房に近付いて)、

「ことならば 馴らしの枝に ならさなむ 葉守の神の 許しありきと (和歌 36-10)

「折角縁があるんなら もっと仲良くなりたいな (意識 36-10)

*この歌の下敷きは、大和物語(歌物語、作者不詳、推定 951 年成立)の 68 段とされる贈答歌らしい。その大和物語 68 段は、時の左大臣藤原仲平が承香殿女御の女房だった人妻の俊子に気があって、俊子の家の庭のカシワの剪定をさせに職人を派遣したところ、俊子が‘すっかり亭主顔ね’と皮肉った礼歌を贈ったので、仲平が「柏木に葉守の神の座しけるを知らでぞ折りし崇りなさるな(夫君の兵衛佐が来ていたとは知らなかった怒るなよ)」と返歌で詫びた、という話らしい。という事が当該注釈に書いてあるらしい、ということは大和物語についての幾つかのサイトを読み拾って私なりに理解した。というくらい分かり難い注釈で、そのままの転用は断念した。だからこの解釈も多分という程度の頼り無さだ。が、是を前提に先に進む。と、引き歌で「葉守の神」を<御守の督=兵衛府、衛門府またその衛士たち>に準えている事が、此処の歌の詠み方の手本になっている、と知れる。たぶん是は、衛門府や兵衛府の詰所か官舎の側にカシワが生えていたこと、とかに洒落た言い回しなのだろう。ところで、カシワが<葉守の神が宿る木>という伝承(大辞泉)は何処からまたは何に由来するのか。中国故事だろうと当たりを付けても、それらしい説明が見つからない。と、「GKZ 植物図鑑」サイトの参照考察文に「カシワとコノテガシワ」というページがあって、中国で「柏(ハク)」と書くとヒノキ科の<常緑針葉樹のコノテガシワ>を指し、それが「松柏」という常緑長寿の祝言葉の基になっているとの説明があり、またコノテガシワの実が薬用とされたことから、「柏」が<葉守の神が宿る木>とされたらしいと示唆されていた。また同ページには、その「柏」が日本ではブナ科の<落葉広葉樹のカシワ>のことに炊く葉の縁で誤用された、ともあり、その混同が冬に葉が黄化する「カシワ」が<葉守の神が宿る木>だという分かり難さに繋がっている、かの示唆もある。でも此処では黄葉する「カシワ」だからこそ、紅葉する「カエデ」との相性が良い。楽しんだ者勝ちではあるのだろうが、素直に楽しむにも素養は必要らしい。さて本文だが、「ことならば」は<同じことなら>という言い方で、此処では<折角縁があるのなら>。「馴らし」は「馴らす(慣れ親しむ)」の連用名詞で<慣れ親しむ仲>。「枝」は、「枝を交わす」が<連理の枝の喩えから深い夫婦仲>を意味するらしいが、「枝」それ自体で<手足>を意味し、「枝を馴らす」は<手足を絡ませた濃厚な性戯>を思わせる。表面上は「馴らしの枝にならさなむ」は<せいぜい仲良くしましょう>だが、そのイヤラシイ響きこそがこの歌の味わいなのだろう。「葉守の神の許しありきと」は<あなたの夫君の衛門督の許しがあったのだから>という厚かましい口説文句を、カシワを出汁にすることで大っぴらに言い放てた、という難問打破の見本みたいな言い回し。いやしかし、言葉はどんな人とがどういう時にどんな言い方をするかで聞き手の印象は違う。即ち、意味が違ってくる。話者の意に反して、ヤブヘビ、キジナキ、に成ることなど普通で、だから下手な鉄砲を数撃って場数を踏むことが肝要だ。

御簾の外の隔てあるほどこそ(私を御簾の外に置く余所余所しさは)、恨めしけれ(辛いです)」

とて(と宮への贈歌を伝えさせて)、長押に寄りゐたまへり(室内との段差に身を寄り掛けていらっしやいます)。

「なよび姿はた(大将のくつろぎ姿はまた)、いといたうたをやぎけるをや(本当にとっても優美なこと)」と、これかれつきしろふ(と女房たちは口々にささやきます)。

この御あへしらひきこゆる少将の君といふ人して(宮様は応対をお仕え申す少将の君という上臆をして)、

「柏木に 葉守の神は まさずとも 人ならすべき 宿の梢か (和歌 36-11)

「折角なのか 生憎か 返るでも無い 柏木の縁 (意識 36-11)

*三句の「まさずとも」の接続助詞「とも」は<仮に~であったとしても>と反実仮想を提示して、以下に述べる認識判断がその場合でも同様なことから、まして現状では確実だという論旨の強調語用だ。「宿の梢」は<家の枝先=夫の形見>であり<夫の片身>たる宮自身の自覚を示してもいるのだろう。庭のカシワとカエデの風情詠みには付き合いながらも、歌意は<例えその庭のカシワに夫の尊い愛情が残っていないなくても他の男と親しくする気はありません私には>という断固たる拒否だ。にべも無い、ようにも見えるが、反発は意識している証拠とか、厭よ厭よも好きの内とか、受け取り方はさまざまだ。

うちつけなる御言の葉になむ(意外なお言葉に)、浅う思ひたまへなりぬる(呆れます)」

と聞こゆれば(と申し上げると)、げにと思すに(大将は宮の返歌を妥当なお考えとお思いになり)、すこしほほ笑みたまひぬ(その素直な態度が楽しく、少し苦笑なさいました)。

[第六段 夕霧、御息所と対話]

御息所ゐざり出でたまふけはひすれば(御息所が膝を進めて出ていらっしやる気配がしたので)、やをらゐ直りたまひぬ(大将は静かに居ずまいを正しなさいました)。

「憂き世の中を思ひたまへ(世の中を憂いまして)沈む月日の積もるけぢめにや(引き籠もる月日が長くなった所為か)、乱り心地もあやしう(気分の悪さもひどくて)ほればれしうて過ぐしはべるを(正気を失いそうに過ごしておりますが)、かくたびたび重ねさせたまふ御訪らひの(このように大将がたびたび重ねて御見舞下さる)、いとかたじけなきに(かたじけなきに)、思ひたまへ起こしてなむ(奮起して起きてまいりました)」

とて、げに悩ましげなる御けはひなり(と言って本当に苦しそうな御体調です)。

「思ほし嘆くは(不幸を思い嘆きなさるのは)、世のことわりなれど(当然ですが)、またいとさのみはいかが(またそればかりと言うのも如何なものでしょう)。よろづのこと、さるべきにこそはべめれ(万事は天命です)。さすがに限りある世になむ(何しろ誰でも死にますから)」

と、慰めきこえたまふ(と大将は慰め申しなさいます)。

「この宮こそ、*聞きしよりは心の奥見えたまへ(この宮は聞いていたほど打算的でなく督に対して深い心情をお持ちのようだ)、あはれ(それは良いが)、げに(実際問題としては)、いかに人

笑はれなることを取り添へて思すらむ(不幸に見られることを夫の不幸以上に嫌がっていらっしやるらしい) *「聞きしより」の「聞きし」の内容は<藤原殿が話を進めて朱雀院もそれに乗ったので打算で結婚した。衛門督との関係も熱愛ではなく円満を装う形式的なものだった。>みたいなことと推察される。

と思ふもただならねば(と思うと大将は宮に生身の女を実感して高ぶり)、いたう心とどめて(とても気になって)、御ありさまも問ひきこえたまひけり(宮の御様子を御息所に尋ね申しなさいました)。

「容貌ぞいと*まほにはえものしたまふまじけれど(顔立ちは十分に美しくはいらっしやらないようだが)、いと見苦しくかたはらいたきほどにだにあらずは(ひどく見苦しく肩身が狭いほどでもなければ)、などて(どうして)、見る目により人をも思ひ飽き(見た目で人に愛想を尽かしたり)、また、*さるまじきに心をも惑はすべきぞ(また不心得にも形ばかりの結婚で人を欺いたりして良いものか)。*さま悪しや(それは宮家に対して不道德だ)。 *「まほ」はくよくよく整っているさま。程度が十分なさま。>と古語辞典にある。が、此处で宮の容姿に何らかの評価をすること自体が唐突で、御息所に「御ありさまも問ひきこえたまひけり」とはあったが、其処で御息所が宮の容姿について特に悪いということをする必要はないだろうし、言わない。仮に何らかの容姿に関する話題になっても、此处で源君が「ものしたまふまじ」と強い心証を得るには、通り一遍の話だけで確証など得られないし、例えば目の前の母御息所が酷い醜女だというような直接自分が確かめた根拠がある筈だが、更衣とは言え朱雀院の妃として入内した者が特別な悪相では決して有り得ない。注には此处の文意について<『完訳』は「ご器量はそれほど申し分のないというほどではいらっしやらないようだけれど」「柏木の情愛の薄さを根拠に推量」と注す。>とある。「柏木の情愛の薄さを根拠に推量」と注す、にしても、余りにも脈絡が繋がらない文で分かり難いが、以下の話題が故衛門督と源君との対比になっているので、確かに、この源君の内心文は藤君から聞かされていた宮の印象、であれば当事者の弁として信憑性が高い、と取る以外にはなさそうだ。そう言えば、直前に「この宮こそ聞きしよりは心の奥見えたまへ」とも確かにあった。ただ、情愛が薄い結婚という話題は結婚当初から語られていたが、宮の容姿が特に劣るということは以前に話題にならなかったし、それが藤君に三の宮との密通を思い立たせた、ということではなかったと思う。尤も、若菜下巻七章一段にあった「人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはずれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ、慰めがたき嫉捨にて、人目に咎めらるまじきばかりに、もてなしきこえたまへり」という文を、督の心情に即した語りと読めば、藤君の遣る瀬無い思いも今さらに感じられる気もする。 *「さるまじき」はくあってはならない=規範に反する>。「心を惑はす」は<人の気持を迷わせる=欺く>。注には<『集成』は「柏木のことを思うのである」と注す。>とある。藤君は宮を騙したのだろうか、何か嘘を言っていたのだろうか。藤君と三の宮との不義密通は、源君にとってはまだ疑念であって確信ではないから、此处での話題対象体はその秘匿とは別の事柄だ。となると、藤君が二の宮を三の宮の身代わりとして貰い受けた事それ自体が、三の宮に対して欺瞞だ、という倫理観だろうか。しかし、その倫理観は皮肉にも、藤君と同じ王女コンプレックスというか臣下の引け目を源君も持っている、ということの意味する。ただ、そうなる「思ひ飽き」や「心をも惑はす」に<奉る>の謙讓語が付くべきにも思えるが、内心での論理考察文故の省略ということにして置くか。非常に難解だが、一応そう考えて置く。 *「さま悪しや」は<それは悪いことだ>だろうが、こういう漠然とした言い方をするとき、何かの価値観に捉われている。日常的には、多くの場合、それは社会通念であり、主な法律であり、基本規範に照らして範疇外と認識されること、に対して言われる。が、未亡人の宮に対して自分が能動的に働き掛ける規範を考える時に、社会通念の焦点は宮の身分に集中するのではないか。それでも宮本人が余りに見映えが悪ければ自分の対応能力を超えるが、そうで無い限りは王家の誇りは自分が関わるに十分な価値がある、と源君は考えたのだろう。そう読まないで私自身が納得できないので、左様に補語する。

ただ、心ばせのみこそ(宮様に於かれては、ただ気立ての良さこそが)、言ひもてゆかむには(結局は)、*やむごとなかるべけれ(尊いものなのだ)」と思ほす(と大将はお考えになります)。 *「やむごとなかるべけれ」はくとても大事だ>という規範意識ではなくくとても尊い>という価値観だ。やはり王家様式への尊敬なのだろう。かつて花散里の不器量を蔑んでいた学生君も出世して世間を高所から見ると、自分の拠って立つべき価値観が王家の伝統様式だと思ひ知ったのだろう。尤も、是が成長なのか老いなのかは見方が分かれるところだ。

「今はなほ昔に思ほしなずらへて(今は私を故衛門督とお思いなさって)、疎からずもてなさせたまへ(遠慮なく何なりとお申し付け下さい)」

など(などと大将は)、わざと懸想びてはあらねど(わざと事務的ながら)、ねむごろにけしきばみて聞こえたまふ(親切そうな調子でお話し申しなさいます)。直衣姿いとあざやかにて(その平服姿はとても美しく)、丈だちものものしう(背が高く)、そぞろかにぞ見えたまひける(大男に見えるなさいます)。

「*かの大殿は(かのおとどは、前の御主人は)、よろづのことなつかしうなまめき(何事も優しく優美で)、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり(上品で魅力的なことは無類でした)」
*「かの大殿は」はく柏木をさす。夕霧との比較。>と注にある。「大殿」はく家の当主>という言い方なのだろう。

「これは(こちらの大將は)、男々しうはなやかに(男らしく派手で)、あなきよらと(ああ美しいと)、ふと見えたまふにほひぞ(ふとお見えに成る表情が)、人に似ぬや(他にいません)」

と、うちささめきて(と噂し合って)、

「同じうは(出来れば)、かやうにても出で入りたまはましかば(宮の婿殿としてお出入りして下さい)」

など、人びと言ふめり(などと女房たちは言っているようでした)。

「*右将軍が墓に草初めて青し(うしやうぐんがつかにくさはじめてあをし)」 *この詞は出典参照に<「天与善人吾不信 右将軍墓草初秋」(本朝秀句-河海抄所引)>とある。注釈には、各写本に於いてこの部分に付された付箋や書入についての列挙が在るようで、出来ればそれらは補注に回して、注にはその要約を示して貰いたい所だが、止む無く自分で要約すると、「天与善人吾不信 右将軍墓草初秋」は紀在昌(きのありまさ、平安中期の儒学者らしい)が藤原時平の子であった右近衛大将の藤原保忠の死を悼んで作った漢詩、ということらしい。その上で注には<紀在昌の詩句は『本朝秀句』所収。現在逸書。『河海抄』所引によれば、原詩は「初青」ではなく「初秋」とあった。夕霧が言い換えたものか。>とある。「原詩」といっても「天与善人吾不信 右将軍墓草初秋」だけでは、是が本文全文なのか、一部なのか、表題なのか、それさえ不明だ。「天与善人吾不信(てんよぜんにんわふしん)」は<天は善人に味方するというが私は信じられない>という個人を悼む決まり文句らしく、それを以て「右将軍墓草初秋(うしやうぐんぼそうしょしゅう)」で<もう一周忌(墓眠した初年)とは何と果敢無い>と嘆いている、ものようだ。また、この句は前の文からの続きとしての何かを受けてもいないので、源君の宮邸への訪問場面は前の文で終わっていて、此処は以下の文を見ても公式の場面であるような印象であり、そうした場面転換や場面説明が無いのは非常に不満だが、文意から場面を読み汲むと、どうやら朝廷による墓前法要の場面が変わっていると見るべき

ものようだ。だとしたら、故衛門督の墓前で公に「右將軍」を引き合いに出す意味は何なのか。保忠は時平 20 歳近衛中将の時の長子だが、時平が左大臣まで昇り詰めたものの 39 歳で早世したので、それ以降の出世は遅れ 47 歳で 936 年の秋に大納言兼近衛右大将で死んだ人らしい。時平に続く早世は道真の祟りと世間で噂され、本人もそれを気に病んでいたとも伝えられているらしい。藤河家利昭広島女学院大学教授の Web 公開論文に、保忠が当代切つての文化人だった、ということからも、此の物語の衛門督に準えられる、との指摘もあった。恐らくはそうした時平と道真との確執構図を藤原殿と源氏殿との関係に準える意図や、その煽りを受けた有能な保忠の死を藤君に準える意図は、作者にあったろうし、読者の期待に応える所でもあったのだろう。でなければ、衛門督は左右どちらか分からないが、右大将と職掌が違うことは明らかで、大納言の地位が共通していることも本旨ではなく、肩書きもそれなりの重さはあるものの、むしろ文化人たる藤原保忠の個人特性を優美だった藤君に準えるという意味に於いて、この源君の墓前法要での詠唱を読者は納得したのだろう。

と(と大将は故衛門督の墓前法要で)、うち口ずさびて(能吏の死を悼んだ前例の漢詩を口ずさんだが)、*それもいと近き世のことなれば(督の早世はごく最近のことだったので)、さまざまに近う遠う(さまざまに今や昔の思い出に)、心乱るやうなりし世の中に(気持が乱される者が多い中で)、高きも下れるも(位の高い者も低い者も)、惜しみあたらしがらぬはなきも(督の死を残念で惜しがらない者がいないのも)、むべむべしき方をばさるものにて(公人としての仕事振りは言うまでもなく)、あやしう情けを立てたる人にぞものしたまひければ(非常に気配りのある人でいらっしやったので)、さしもあるまじき公人(取るに足らない役人や)、女房などの年古めきたるどもさへ(女房などの年老いた者まで)、恋ひ悲しびきこゆる(慕い悲しみ申します)。 *「それもいと近き世のことなれば」は注に<右大将藤原保忠の死去は朱雀天皇の承平六年(九三六)七月十四日。四十七歳。>とある。ということは、「それ」は引用した漢詩で詠まれた出来事、と解しているようだ。が、「それも」の「も」は強調の助詞というより詠嘆の語感だ。この物語の成立は 1010 年頃とされ、話の設定はそれ以前の時代だとしても、天皇の御世で 5~6 代、藤原摂関家で 10 代くらい前の事柄に実感を持つ人が、当時の読者の中にどれほど居たのだろう。この「それ」は衛門督が亡くなったのがこの二月と最近のことだった、ということを行っているとは私は読む。

まして(まして督を信頼していらっしやった)、上には(帝に於かれては)、御遊びなどの折ごとにも(管弦演奏の折ごとにも)、まづ思し出でてなむ(いつも督を思い出しなさって)、しのばせたまひける(懐かしがりなさいます)。

「あはれ、衛門督(衛門督が居ればなあ)」といふ言種(ことぐさ、という言葉)、何ごとにつけても言はぬ人なし(何かにつけて誰かが言わないことはありません)。

六条の院には(六条院源氏殿にあつては)、ましてあはれと思し出づること(更にその不在を実感して督を思い出し為さる事が)、月日に添へて多かり(日を追うごとに多くなりました)。この若君を(若君を)、御心一つには形見と見なしたまへど(殿の御心一つには督の形見と見做していらっしやったが)、人の思ひ寄らぬことなれば(他人の思ひ寄らないことなので)、いとかひなし(何ともしようがありません)。秋つ方になれば(秋になる頃には)、この君は(この一月生まれの若君は)、*みざりなど(這い這い歩きなど為さり出して)。 *「みざりなど」は注に<河内本はこの後にさらに五十八字の文章が続く。別本では御物本と保坂本に同文がある。大島本は切り裂いて削除した跡が見られる。言いさした終わり方である。>とある。この渋谷教授校訂文は「定家自筆本」とのこと。「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」サイトにある当該文は「秋つかたになればこの君ははひみさりなとし給さまのいふよしなくおかしけ

なれは人めのみにもあらずまことかなしとおもひきこえ給ふつねにいたきもてあそひきこえたまふ」とある。で、この部分の与謝野訳文は「秋になったころからこの若君は這いなどなさる様子が言いようもないくらいかわいいので、院は人前ばかりでなく、しんからいとしくて、いつも抱いて大事になさるのであった。」とある。言い差しで終わるのは斬新だが、不自然だ。それに別本にある内容は、表面は和やかだが言い差しの手に余る予感を損なうものでもなく、もし後から割愛したのなら意図は不明だ。

(2012年7月17日、読了)